

大 学 史 研 究 通 信

第 91 号 2017 年 12 月 31 日 (日)

大学史研究会

第 91 号の内容：追悼・会員ニュース・2017 年度研究セミナー報告・2017 年度総会報告・2017 年度会計報告・大学史勉強会のお知らせ・『大学史研究』編集委員会からのお知らせ・事務局からのお知らせ・編集後記・大学史研究会事務局員一覧

追悼

前号でお伝え致しましたように、本会名誉会員の皆川卓三先生（神奈川県立衛生短期大学元学長・名誉教授）が、2017 年 6 月 17 日に逝去されました（享年 94 歳）。ここに、寺崎昌男先生による追悼のお言葉を掲載致します。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

大学史セミナーにおける皆川卓三先生

寺崎昌男

いつも笑顔でお元気だった。セミナーのときにはラテンアメリカ諸国のうちどれかの国を選んで、その個別大学史を必ず発表された。ユーモアや諧謔がお好きで、若い人との交わりを好まれた。セミナーを始めた 3 人を指して、「横尾先生は優秀なドライバー、中山先生はパワフルなエンジン、寺崎先生は上質のガソリンですよ」などとおっしゃっていた。その先生自身もセミナーの途中から科研費の代表者になられ、めでたく「ガソリン 2 代目」が生まれた。横尾壮英さんの電話で代表者を引き受けられた時の台詞は「先生方のおっしゃることなら人殺し以外は何でもします」というものだったそうである。そのころからセミナーでは「会長！」というニックネームがついたが、別に気にされる風もなく、「会長と呼ばれる皆川です」などと自称しておられた。

*

*

皆川先生を「発見」されたのは横尾さんである。

1967 年に寺崎科研を申請しようと横尾さん・中山さんと話し合っているうちに「いったい大学史をやっている人は全国にどれくらいいるのか」という話になった。西洋教育史を受け持った横尾さんの見つけ出した 1 人が「山形大学にいてラテンアメリカ教育史をやっている皆川卓三という人」だった。顔も名前も知らないままに、私は研究代表者として手紙を書き、1968 年 10 月の第 1 回目の鎌倉セミナーにお呼びした。

全くの初対面である。わりに無口な方だと思ったが、場の雰囲気には誰よりも感動しておられたのは先生だった。直後に教育史学会大会でお会いすると「いいですねえ、科学史の方たちって本当に頭の回転が速いですねえ、目が回りましたよ。でも大変な勉強になりました。ぜひ次も呼んで下さいよ」と切に頼まれた。単なる社交辞令ではなかった。

ときは大学紛争ピークの時期である。「大学問題」に関心を持たない人はなかったが、「大学史をご一緒に」などという、多くの人を引いた。その中でこういう年配の先生が感動して下さる。主催した側の一人として、大いに安堵したのを憶えている。

ちなみにセミナーが騒がしかったのは確かで、科学史では板倉聖宣、中川米造、八木江里、それに何と言っても中山茂、教育史では平野一郎、麻生誠、といったいずれ劣らぬ論客たちの歯に衣を着せない論争が続いた。先生が目回されたのも無理はない。他方、「年配の」というのは失礼かもしれない。当時私は 35 歳、先生はまだ 43、4 歳ではなかったか。

*

*

長いお付き合いが始まった。

先生は1969年にはもう神奈川県立衛生短期大学に移っておられたが、毎回のセミナーの実に勤勉な出席者だった。その勤勉さが招いたのが、セミナーのテープ起こしの作業である。「この種の研究会の弱点はいつ何をやったか忘れてしまうことだ」と思っていた私は、科研費で、ともかくテープレコーダーとテープ（両方とも当時は決して安くはない「備品」だった）を買い入れ録音したテープをため込んでいたが、その処置に困っていた。そこで登場したのがまた横尾さんである。皆川先生の記録では、1969年12月の宮島セミナーの二日目の朝食後の席である。

横尾さんが突然“今回のものもあわせて3回のセミナーの、報告や討論をすべてテープに録音してある。このテープから、日時・場所・参加者の記録を最低必須内容にしたくセミナーの記録>をおこしたいと思う。この仕事を皆川さんにまかせたらどうだろうか”と参加者諸氏に相談をした。このような指名の相談に他の人々が反対するはずもなく、その場で全員一致で私が引き受けることにきまった。

不意の抜き打ち、いわば謀殺である。横尾さんならではの所業だが、当時の大学史研究会はこんなものだった。このときから70年代後半まで皆川先生の営々たる努力が続いた。鎌倉セミナー以来「大学史研究通信」終刊の1978年（第11号）までにセミナーは13回開催されたが、そのうち11回分の記録は先生一人の努力によるものである。発言者名こそ記されていないが論点はまことに正確で、当事者として読むと、議論の混乱も推移も昨日のこのように思い出される。

先生は「研究通信」11号に『『大学史研究セミナーの記録』の回顧』という長い文章を書いておられる。記録作業は実時間の4、5倍はかかり、「傍聴」していた息子さんなど、声で誰かわかるようになっておられたという。先生は周囲に恩に着せたり恨んだりされたことは一度もなかった。セミナーでは、楽しい任務であるかのように語っておられた。

*

*

先生がよく洩らされたのは、「どうして日本の西洋教育史は「ドイツ」ばかりなんですか」ということだった。外から見ても、先生の学ばれた東京文理科大学の教育史研究室の動向はそれに近かった。先生はその雰囲気にもなじめなかったようである。先生はそこから距離を置いてラテンアメリカ教育史に専念され、学閥にこだわらない大学史研究会に寄せられたことになる。

その先生の発表を通じて、例えばチリにおける国立大学の創立事情と宗主国スペインとの関係など、それこそ「もう一つの西洋」の話聞くように興味深く知ることができた。また中山さんが指摘したことだったと思うが、「ラテンアメリカ大学史はベルリン大学モデルにはまらないもう一つの大学形態だ」ということも、刺激的に認識することができた。

浜名湖セミナーのときだったか、ラテンアメリカの多くの国の大学統計資料で学生数がはっきり出ない、弱っている、ということ先生が洩らされるので、数人が思わず笑った。すると先生は「いま笑っている方たちなど、日本の統計がいかに正確だと思っておられるのでしょうか。でも、実際に目の前にいる学生数と学期末の学生数と同じではない。その間に退学したり入学を取り消したりする学生が実に多いからですよ。皆さんもよくご存知のはずです。どの国だって統計が一分一厘正しいということはないのです」と笑いながらも辛辣に返された。笑った側も首をすくめたものである。このやり取りのときもそうだったが、発表されるときの先生の口調は「話芸」と言ってよいほど味があった。

大学史以外の教育史一般についても先生の関心は深かった。セミナーの途上、1976年に、先生はラテンアメリカ教育史を展望した文字通り未曾有の大著を出された。現在の若い会員の方たちにはあまり知られていない業績かも知れないので、当時私が朝日新聞の「閲覧室」というコラムに書いた紹介記事を再録しておこう。

『ラテンアメリカ教育史』I・II 皆川卓三著

これまでのわが国の外国教育史研究には対象地域に重大な偏りがあった。ドイツ、イギリス、アメリカなど「先進国」については専門家に事欠かないが、東欧・北欧諸国やラテン系諸国を手がける人は少ない。中国を中心とする東アジア地域についてはかなりの蓄積があるが、インド、東南アジア諸国については極めて乏しい。まして、アフリカ、ラテンアメリカ諸国などの教育史は、ほとんど未開拓に近かった。

本書はそのラテンアメリカにはじめてクワを入れた通史である。研究史上の開拓的意味をもつだけでなく、私たち日本人の世界教育史像の形成にとって、画期的な意味を持つ労作だと思われる。

著者は、古代マヤ、アステカ、インカ帝国の教育状態の叙述からはじめて、スペインによる植民政策の展開、啓蒙思想と近代教育制度の移入、さらに第二次世界大戦後 1960 年代にいたるナショナリズムの展開と教育の自立過程とを、克明に展望している。対象国も、メキシコ、ブラジル、チリ、アルゼンチンから、ボリビア、ベネズエラ、革命後のキューバなどほとんどすべての国におよんでいる。参照文献は単行本だけで約 400 種、スペイン語による史料も駆使され、II の巻末には文献解題と詳細な年表がのせられている。

著者の分析視角については、よりラジカルな立場からの批判もありえよう。しかし本書によって厳正着実な私たちで明らかにされた史実や素材が、今後の研究に確実な基礎をあたえるものであることは間違いあるまい。梅根悟氏監修「世界教育史大系」の第 19, 20 巻にあたる。(講談社、各 3,200 円)。<1976 年 5 月 10 日朝刊>

あの当時、大学史などに足を踏み入れるには、既成のディシプリン・グループへの不満やグループからの疎外感、あるいは大学研究への欲得を離れた好奇心や執着といった動機が必要だったように思う。セミナー発足の後、宮島セミナーから出席された上山安敏さんは、後年、要旨次のように語られた。

セミナーに出て見て、実は『この人たちは何なのだろう』と思いました。でもだんだん専攻を聞いたり所属を聞いたりしているうちに、『ああ、ここは浪人の集まりなのだ』ということが分かりました。そして自分が京大法学部教授などというものであることが急に恥ずかしくなりました」(「大学史研究通信」復刻版、附録座談会、2004 年、日本図書センター)

皆川先生は、まさに「自分は路地裏で暮らしてきた浪人だ」と思っておられたにちがいない。しかしこの浪人は、めげず、明るかった。黙って張り続けた傘が、貴重な著作やセミナー記録の山になった。昇天を惜しむとともに、ご一緒に意味ある仕事が出来たことに深く感謝する。

追悼

会員ニュース

新入会員

加藤雄大会員 (学生)

所属：日本大学大学院文学研究科

研究テーマ：戦後日本の高等教育機関における一般教育に関する議論の研究

佐々木渉会員 (学生)

所属：大阪大学大学院人間科学研究科

研究テーマ：分析哲学、科学哲学、形而上学

高岡萌会員（学生）

所属：大阪大学大学院文学研究科

研究テーマ：近代高等教育、誘致運動、制度改革

新入会員自己紹介

加藤雄大会員

この度新しく入会させていただきました、日本大学大学院文学研究科教育学専攻博士前期課程加藤雄大と申します。この度は入会を許可していただき、ありがとうございました。大学に入学した頃から大学教育に強い関心があり、現在は1950年代日本の大学教員・大学関係者による「一般教育」をめぐる議論について研究しております。

学部の卒論では、1980年代臨時教育審議会における一般教育に関する議論について研究をしていました。現在の研究テーマには大学院に進学してから取り組みはじめたので、恥ずかしながらもまだ歴史研究の経験は非常に浅いです。そのような中で先日の第40回大学史研究セミナー個人報告では、フロアの先生方から有益かつ刺激的なコメントをいくつもいただくことができ、大変有意義な時間となりました。ありがとうございました。

今後は、まずは上記のテーマに関しての修士論文を提出し、その後もし機会があるようならば博士後期課程に進学し、さらに深く研究を進めていきたいと考えております。未熟者かつ若輩者の身で大変恐縮ではありますが、今後ともご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い致します。

佐々木渉会員

新しく入会させていただきました佐々木渉と申します。専門は分析哲学で、特に形而上学をテーマに博士前期課程にて研究をさせていただいております。もとより大学の歴史や制度の変遷に関心があり、このたび分析哲学の歴史と英語圏を中心とした大学の制度史などの関わりについても研究を深められたらなと思ひ、入会を希望させていただくに至った次第でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。

高岡萌会員

この度入会させていただきました高岡萌と申します。現在、大阪大学大学院文学研究科文化形態論専攻日本史学に所属しております。学部生の頃以来、佐賀育英会などの奨学事業を事例に地域の教育活動の研究も進めております。修士課程から続けている研究テーマは、近代日本の高等教育の制度改革・増設政策・誘致運動です。特に、大正期の第二次高等学校令制定と高等教育機関増設政策をめぐる政治過程を近代日本の高等教育の画期と位置づけて研究を進めております。大学史研究会はこれまでの興味をもってはいたものようやく入会したという状況ですので、様々な活動に参加させていただきたいと思ひます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

<異動に伴う会員情報更新の届出をお願いいたします>

所属や住所等に変更のある会員は、事務局までご一報ください。ホームページ掲載の「事務局連絡先」フォーム、あるいは年会費払込票（郵便口座）の「通信欄」を利用することも可能です。

また、今後は会員の皆様への連絡を、「通信」と併せてメールで配信していくことも検討しております。事務局へのご登録が旧アドレスのままの方や、メールアドレスの登録をされていない方はご連絡いただきますよう、ご協力をお願いいたします。

（会員情報担当：浅沼薫奈）

2017年度研究セミナー報告

2017年11月18日(土)、19日(日)、香川大学において第40回大学史研究セミナーを開催いたしました。当日の参加者は2日合わせて21名でした。「開催校からの御礼」および「セミナー参加記」を掲載いたします。

開催校からの御礼

山本珠美(香川大学)

遠路はるばる四国・高松までお越し頂き、ありがとうございました。

急激に冷え込んだ週末でしたが、初日のシンポジウムも、二日目の自由研究発表も、会場内は熱気に溢れており、充実した二日間ではなかったかと思えます。ただ、皇太子夫妻が参加する全国育樹祭と日程が被り、県外からお越しの皆様には飛行機やホテルの予約にご苦労されたとのこと、申し訳なく思っております。

また「せっかくなら美味しい郷土料理が食べられる懇親会にしたい」という私の我が儘から、今回は学内ではなく街中のうどん川福本店を懇親会場に設定させて頂きました。香川県民のソウルフード、讃岐の「うどんすき」が参加された皆様のお口に合っていたことを祈るばかりです。

今回でセミナーは40回目を数え、また、大学史研究会が発足して50年目の節目となる年でした。今後一層、大学史研究が深まっていくことを願って、開催校からの御礼の挨拶とさせて頂きます。

研究セミナー参加記

高岡萌(大阪大学・大学院)

第40回大学史研究会研究セミナーは、高知大学生涯学習研究センターを会場に11月18日・19日で実施された。なお、初日である18日にシンポジウム、2日目である19日に自由研究発表が行われた。

筆者は、事務局の船勢肇氏にお声がけいただき、本会への入会と同時に自由研究発表の機会を得ることができた。良くも悪くも、大学史研究会がいかなる性格の学会なのかをわからないまま参加したともいえる。筆者にとってそれが幸いし、これまでほとんど触れることのなかった研究視覚や分析手法と出会うことができた。

特に、シンポジウム「近代日本の学校システムによる学生の包摂と排除」のテーマで報告された和崎光太郎氏と井上義和氏の研究には、制度・政策といった内容を主に取り扱い、政治過程を重視してきた筆者にとって思いもよらないものであり、大きな収穫であった。

和崎報告では「学生」概念の普及がもたらす社会の変化を「包摂」「排除」が多層的な関係を取り結んでいくことが解き明かされた。また、井上報告が扱う雄弁青年・右傾学生の姿から、「包摂」を望むがために「排除」に曝される矛盾を見て取ることができた。和崎氏・井上氏の報告からは、近代日本の「学生」「青年」がいかなる立場におかれていたことを鮮やかに構造的に描き出していると感じた。ここから描き出された歴史像は、学生文化と学校システムを結びつけて検討するという視点を提供するものであり、さらには政治史(地方利益誘導)・地域史(誘致運動)などの諸研究を進める上でも、根底として踏まえるべき点であると感じた。

また、2日目の自由研究発表でも、戦後の一般教育に対する大学教員の認識を新出史料を縦横無尽に活用して描き出した加藤雄大氏、オスマン帝国が行った法律関係の学校教育の丹念な検討から法曹養成を明らかにした長谷部圭彦氏、自身の生涯学習教育の活動を問題関心

の中核にすえつつ菊池大麓の大学拡張思想・実践を通時的に示した山本珠美氏による発表があり、興味深く拝聴することができた。

筆者の発表についても的確かつ手厳しい指摘・批判をいただき、自省すべき点多々あることも痛感できた。それらも含めて、やはり貴重な機会をいただけたという思いを強くしている。末筆ではあるが、貴重な発表だけでなく研究セミナーの受入ホストも務めていただき、地元の有名店（うどん川福本店）での懇親会も開催していただいた山本珠美氏には深く御礼を申し上げたい。

2017年度総会報告

研究セミナー後に開催されました総会につきまして、以下に概要をご報告いたします。

日時：2017年11月18日（土）

会場：香川大学幸町キャンパス 生涯学習教育研究センター

1. 2017年度の活動

1.1 事業報告

岡田局員より、紀要『大学史研究』第26号について、東信堂に入稿し、12月中の刊行である旨報告がなされた。

1.2 大学史勉強会について

大学史に関わる勉強会を今年度から開始した。月に1回程度開催している。

1.3 2017年度決算の報告・会計監査報告

会計担当の山崎局員より決算報告が行われた。続いて、監査の吉野剛弘会員より、2017年度も問題なく会計業務が執行されていることが報告された後、決算が承認された。

2. 2018年度の活動

2.1 岡田事務局員より、2018年度はセミナー開催50回を迎えるため、記念企画を考えていきたい旨提案がなされた。

2.2 紀要『大学史研究』についてはセミナー50回の記念企画との関連もあり、出版の在り方を含めて検討を行う方向性を確認した。

2.3 会計監査の吉野剛弘会員から退任の意向が示された。後任については井上美香子会員とすることで承認された。

2.4 2018年度の予算について山崎事務局員より予算案が提案されたのち、全会一致で承認された。

（通信担当：山本尚史）

2017年度会計報告

大学史研究会2017年度会計ならびに2018年度予算案につきまして、以下に概要をご報告いたします（本号10頁もご参照ください）。

*2017年度の収支報告

【収入】

2016年度会計からの繰越金は、5,542,552円でした。2017年度年会費につきましては76名の会員より納入いただき、年会費・入会金の納入総額は、427,000円でした。昨年度と比べ、納入総額は大きく減少していますが、その主たる理由は長期未納者の督促が終わりつつ

ことによります。なお、2017年度の年会費の納付率自体は60%と概ね平年通りとなっています。なお、昨年度も申し上げた通り、例年時期がずれて納金する方がおります。そのため、例えば2016年度のを現時点で見ますと78%、長期未納者を除くと90%近くになります。現時点では、年会費支払いの督促は3年間以上の未納者としているため、この状況を改善するには通知をする必要がありますが、その作業は費用支出になりますので検討している状況です。

いずれにせよ、年会費をお納め下さった会員各位におかれましては、この場を借りてお礼申し上げるとともに、今後も引き続き研究会の発展と円滑な運営のために、年会費納入に対するご理解ご協力をお願い申し上げます。

【支出】

2017年度の編集委員会会議費・交通費は、28,720円、通信費は、83,571円です。これは「大学史研究通信」発行の印刷、会員への諸連絡の印刷物、あるいは、年会費納入依頼通知の印刷等に関わる経費も含んでいます。「事務局会議費・交通費」は76,225円、「人件費・アルバイト代」は5,000円です。なお、「セミナー支出」は158,930円となっていますが、主な理由としては明治大学という立地の良い場所で開催をしたため、それに伴う教室等の借料が挙げられます。その結果として、例年になくセミナー参加者も多かったため、セミナーとしての役割を適切に果たしたものと考えています。

次年度繰越は、5,616,815円、来年度繰越金を除く総支出は353,232円でした。繰越金を除く収支の差は、74,263円のプラスとなりました。

「2017年度会計報告」に明記されているとおり、当該年度の会計は吉野剛弘会員に監査を依頼し、精細な監査の上会計の適正処理をご承認いただきました。なお、吉野会員の会計監査は今年度で終了し、次年度以降は井上美香子会員に依頼する予定になっております。吉野会員には、多忙な中にも関わらず毎年適切な監査業務を遂行して頂き、会計担当への適切なコメントや指摘も度々頂いてまいりました。この場を借りて、改めてお礼申し上げます。

*2018年度の予算案

大学史研究会では、次年度の予算案につきましては、事務局による基本案を総会に提示し、ここでの審議を経て、最終決定をいたしております。例年と同様、2018年度予算も上記の手順にしたがって予算案を決定しましたので、以下にご報告します。

【収入案】

収入は、年会費と紀要売上金の2つになります。とりわけ、本研究会の運営経費は、年会費の納入に大きく依存しております。年会費につきましては、前年度並みの500,000円を収入予定額として設定いたしました。繰り返して恐縮ではありますが、2018年度も会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。総収入額は6,137,815円、繰越金を除く総収入額は521,000円といたしました。

【支出案】

支出案は、例年の予算案で設定している支出項目と支出額を考慮しつつ、算出いたしました。『大学史研究』を発行する予定になっております。その発行経費（制作・印刷・発送費の総計）を600,000円計上しました。編集委員会会議費・交通費は50,000円、事務局会議・交通費は80,000円としました。その他の諸経費も、ほぼ例年通りの額を計上しております。消耗品費・手数料は10,000円、謝金は30,000円、印刷費は50,000円です。通信費は90,000円でこれはホームページの費用も含んでいます。また、予備費として200,000円を計上しております。2017年度から次年度への繰越金は5,027,815円、繰越金をのぞく総支出予算案は1,100,000円を予定しております。

本研究会におきましては、全体として緊縮財政をうたってはおりますものの、研究会として有益と認め得る支出につきましてはやぶさかではありません。大学史研究会の発展のため、

あるいは、会員サービスのために必要な支出の要請がありました際には、事務局で検討し、それが妥当であると判断した場合には、これにお応えしていきたいと考えております。今後とも会員各位からのご提案ご教示を歓迎いたしますとともに、研究会の将来的なビジョンも併せてご検討いただければ、幸いに存じます。

以上、「2017年度会計報告」および「2018年度予算案」につきまして、ご質問ご提案等ございましたら、事務局までご連絡のほどよろしくお願い申し上げます。

(会計担当：山崎慎一)

大学史勉強会のお知らせ

2017年2月から大学史の勉強会を始めています。基本的には大学史にかかわる英語論文を読むという形式で、時折セミナーの打ち合わせをするなどしてきました。現在、論文紹介で使っているのは、教育史家のロイ・ロウが編集した、大学史に関する論文集(5巻本)です。

Roy Lowe ed., *The History of Higher Education: Key Themes*, 5 vols., London: Routledge, 2009, ISBN:9780415384698 etc..

論文紹介に挑戦したい方は、目次のコピーをお送りしますので、事務局メールにお問い合わせください。また、この勉強会ではセミナーの事前勉強会なども行ってまいります。随時大学史研究会ホームページにお知らせいたしますので、ご興味のある方はホームページの行事案内にてご確認ください。

第0回 2017年2月23日(木) 18:30～ 中央大学後楽園キャンパス 6号館 6405 教室

内容：勉強会打ち合わせ、2017年セミナー打ち合わせ

第1回 4月28日(金) 18:30～ 中央大学後楽園キャンパス 6号館 6413 教室

内容：最近の研究関心の紹介

羽田貴史「同時代史大学研究の課題—テクノサイエンスリスク社会における科学技術と大学」

岡田大士「戦争と大学をめぐって—第二次大戦中の日本の事例から」

第2回 6月23日(金) 19:00～ 中央大学後楽園キャンパス 6号館 6413 教室

内容：論文紹介の担当決め

第3回 8月3日(木) 19:00～ 中央大学後楽園キャンパス 3号館 3308 教室

内容：論文紹介

R. D. Anderson, "The Growth of a System" (山本尚史)

John Henry Newman, "Knowledge Its Own End" (加藤雄大)

第4回 9月15日(金) 19:00～ 中央大学後楽園キャンパス 6号館 6413 教室

内容：セミナー企画シンポジウムに関する勉強会

1. 和崎光太郎「〈青年〉史研究序説—〈青年〉の誕生を再考する」『近畿大学教育論叢』27(2)、2016年。

2. 井上義和「エリート・国体・保守主義—戦時体制下の学生思想運動から考える」『RIHE』124、2013年。

第5回 10月28日(土) 19:00～ 中央大学後楽園キャンパス 6号館 6409 教室

内容：論文紹介

A. H. Halsey and M. A. Trow, "The Changing Functions of Universities" (深野政之)

Jose Orlega y Gasset, "Culture and Science" (岡田大士)

第6回 12月16日(土) 19:00～ 中央大学後楽園キャンパス 6号館 6405 教室

内容：論文紹介、2018年セミナー打ち合わせ

Charles Webster, "Except from The Great Instauration: Science, Medicine and Reform, 1626-1660" (岡田大士)

Oliver Fulton, "Modular systems in Britain" (羽田貴史)

『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

ご心配をおかけしております第26号に関して、刊行のめどが立ちました。まもなく東信堂を通じて会員の皆様にお配りできる予定です。この度は刊行が大幅に遅れましたこと、お詫び申し上げます。

引き続き27号の編集作業に入りたいと思います。2017年香川大学のセミナー報告とともに、大学史研究会・編集委員会に貢献され、この間逝去された何人かの会員を追悼する企画を軸として、投稿論文・研究ノートも受け付けてまいります。セミナーでも何人かの会員の方に投稿のお申し出をいただきました。27号は可能な限り2018年中に刊行したいと思いますので、27号への掲載を希望される方は2018年3月末までに岡田 (daishi@home.nifty.jp) まで原稿をお寄せください。

(紀要担当：岡田大士)

事務局からのお知らせ

この度、香川大学で行われましたセミナーにおいて、事務局代表退任を申し出させていただきました。2004年の帝京大学でのセミナーで事務局員、2010年のセミナーで事務局代表となって以来、長い間お世話になりました。この間、うまくいくこともあればうまくいかないこともありました。私が代表に長くいすぎたことも原因の一つかと思っておりますので、引かせていただき、新しい代表を支えていきたいと思っております。

ところで、大学史研究は1968年に第1回セミナーを開始して、次回が50年目の節目の年となります。そこで、来年のセミナーは50年を記念して、大学史研究会、あるいは大学史研究のこれまでを振り返り、これからを展望する企画を開催したいと考えております。また、國學院大学の戸村理会員が開催校をお申し出くださいました。つきましては、セミナー開催に向けて勉強会で事前準備を進めていきたいと思っております。また、既存の第1期『大学史研究通信』復刻版刊行に伴う座談会記録、関係者の証言・覚え書きなどを集めながら記念誌のようなものを出版できればと考えております。歴代事務局の方々とともに取り組んでいきたいと思っておりますので、ご協力のほどお願いいたします。

(事務局代表：岡田大士)

編集後記

私は皆川先生にお会いしたことはありませんが、まったく未開拓の分野をお一人で進まれたその志に、感銘と影響を受けた一人です。私も「浪人」の仲間に入れてください。ご冥福をお祈り申し上げます。

(通信担当：長谷部圭彦)

『大学史研究通信』第91号の編集は、事務局・長谷部圭彦が担当いたしました。

連絡先：hasebekiyohiko@hotmail.com

『大学史研究通信』第92号は、2018年3月31日発行予定です。

収入の部		支出の部	
前年度繰越金	¥ 3,542,252	編集委員会諸費・交通費	¥28,720
年会費等	¥427,800	酒料品費・手数料	¥756
利息	¥492	通信費	¥83,574
		事務局会議費・交通費	¥78,258
		人件費・アルバイト代	¥65,000
		セミナー費用	¥192,930
		次年度繰越金	¥ 3,310,812
計	¥ 4,013,047	計	¥5,870,047

前年度繰越金増収収入 ¥417,496 前年度繰越金全額繰出 ¥332,220
上取差額 ¥74,883

上記のとおり、ご報告いたします。 事務局長 岡田 大士

上記の会計報告について会計監査を実施した結果、預り金ならびに現金預金等は、全て
真実かつ正確に記載されていることと認めましたのでご報告いたします。

会計監査 浅沼 薫奈

2018年度 予算案			
収入の部	金額	支出の部	金額
前年度繰越金	¥5,616,215	雑誌(大学史研究/関連書刊)	¥900,000
年会費・入会費	¥500,000	編集委員会諸費・交通費	¥50,000
大学史研究/関連書刊	¥10,000	事務局会議費・交通費	¥50,000
セミナー開催経費等納入	¥10,000	酒料品費・手数料	¥10,000
利息	¥5,000	謝金(アルバイト)	¥30,000
		印刷費	¥90,000
		通信費	¥90,000
		手帳費	¥200,000
		前年度繰越金	¥5,427,815
計	¥6,137,615	計	¥6,137,615

前年度繰越金増収収入 ¥520,000 前年度繰越金全額繰出 ¥1,110,000

上記のとおり、ご報告いたします。 大学史研究会事務局長

大学史研究会事務局

<事務局連絡先>

〒192-0393 東京都八王子市東中野 742-1

中央大学法学部 研究室受付 岡田大士気付 大学史研究会

Tel&Fax: 042-674-3151 E-mail: daishi@home.nifty.jp

ホームページ <http://daigakushi.jp/>

事務局へのお問い合わせは、なるべく下記代表 E メールアドレスまでお願い致します

E-mail: jshshe@daigakushi.jp

大学史研究会事務局員 (五十音順)

浅沼 薫奈 (大東文化大学)

岡田 大士 (中央大学)

長谷部 圭彦 (早稲田大学)

深野 政之 (大阪府立大学)

船勢 肇 (大阪芸術大学・阪南大学)

山崎 慎一 (桜美林大学)

山本 尚史 (長崎女子短期大学)